

ロシアのウクライナ侵攻が5年目を迎え、加えて今年に入ってからアメリカのヴェネズエラ侵攻、ごく最近のアメリカとイスラエルによるイランへの軍事行動とホルムズ海峡封鎖によるエネルギー危機の可能性から恐怖と不安の時代となってしまった観があります。何せ1941年の日米開戦の直接的な原因はアメリカによる対日石油禁輸であったという歴史的な出来事を見てもエネルギーに関わる問題は戦争を拡大化する大きな要因になり得るのです。第二次世界大戦以降、冷戦の時代を経て、民族間の局地的紛争また大国による覇権主義の台頭を考えるとこれから先何が起こるのか判らない、いや何が起こっても不思議ではないという取り留めのない不安を感じてしまうのです。

こうした中で、偶々デンマーク出身のラース・フォン・トリアーの作品に遭遇したのは偶然でないのかもしれませんが。この1956年生まれこの映画作家を紹介するには言葉を選ばざるを得ません。一般的な紹介文では、「観客の心を最も美しく、最も残酷に逆なでするデンマークの鬼才」といった表現のようですが、強烈で毒のある美学とテーマは観客を狼狽させると同時に遠ざけてしまうことさえありますが、常人とは異なる実に厄介な存在ではあるものの、そこらから生み出される美に対しては抵抗できないものを感じてしまいます。筆者は、フォン・トリアーの最も新しい作品である『ハウス・ジャック・ビルト』（2018）から見始め、長編第1作目から3作目までの「ヨーロッパ三部作」である『エレメント・オブ・クライム』（1984）『エビデミック』（1987）『ヨーロッパ』（1991）を見ただけに過ぎないのですが大いに引っ掛かりを感じています。『ハウス・ジャック・ビルト』については、シリアル・キラーを描いたホラー作品とも解釈できますが、ダンテの「神曲」の煉獄を描いたものであり、人間の醜悪な本質と神聖な芸術・宗教を一切の妥協なく地続きに描くという不快極まりない作品であるもの、この痛みと苦さこそ今の時代に必要なものではないかと考えさせられる作品なのです。

フォン・トリアーの生まれたデンマークは、第二次世界大戦中には、1940年にドイツ軍の突然の侵攻を受け僅か6時間で降伏を決定し、その後は独自の自治権の下にありましたが、国民によるサボタージュやレジスタンス運動が活発化するとドイツによる直接的な軍政へと移行し恐怖政治の色彩が高まる中で、ナチスによるユダヤ人移送計画を察知し一晩で七千人もの人々を中立国スウェーデンに逃すという快挙を行った国家でもありま

す。こうした妥協と反発はデンマークにとって複雑なトラウマと道徳的な葛藤として残存したのは確かでしょう。フォン・トリアーにとってのトラウマは、表面上は平穏ではあるが、その根底にはナチスの残影や罪悪感が渦巻いているというものだったのでしょうか。直接的な大戦の経験がなかった世代に属するフォン・トリアーですが、このあたりは戦後世代の日本人の意識と大きく異なるものを感じます。

第1作目『エレメント・オブ・クライム』は、舞台は明示されませんが、十数年振りにヨーロッパに戻ってきた刑事が謎の犯罪者を追跡し逮捕しようとするのですが、犯人は姿を見せることはありません。まるで幽霊のような存在です。ネオ・ノワール・クライムのジャンルの作品とされながらも実際はそうではなく、戦後ヨーロッパに漂うファシズムや全体主義の残影を描き、トラウマとして抱えるヨーロッパ人の不安と恐怖を表現していると思えます。しかも、画面を覆う異様なセピア、黄色、オレンジの色彩は不思議という言葉で言い表せない不安定な社会状況を的確に表現しています。これはナトリウムランプの使用とネガフィルムのsaturataion（飽和）手法による色付けとされます。長編作品第一作目とは思えない、深い思索と周到な準備をフォン・トリアーは行っています。完全にコマーシャルイズムを排除し、まるで観客を実験台の対象とするフォン・トリアーは、不遜かつ傲慢でさえあります。しかし、その展開される社会こそはまさに現実のものだと感じ入ってしまうのです。本作に頻出する「水」の存在は、生命の根源に関わる性質や浄化の象徴としてではなく、すべてを溶かし腐らせる溶剤としての機能であり、まるで幻滅と回復不可能な絶望感を表現する要素として捉えられます。この極端な思索の根本となるのは、ユダヤ人の血を引いている（後に実父が別の人物であったと判明するという実に複雑な家庭環境があることも大きな要因でしょう）と認識して育ち、ナチスによるホロコーストという歴史的惨劇を、自身の内側にある「恐怖の対象」として深く抱えていたことだと考えられます。フォン・トリアーにとっては、第二次世界大戦が終わり40年近く経った時代も、依然として戦争の延長線上にあり、不安と恐怖の時代であるのです。（続く）